

## 【総 説】

## Wheezing を呈する乳幼児の気道炎症

## — 気管支肺胞洗浄液 (BAL 液) について —

いずみ 泉                      のぶ お 夫

キーワード：wheezing, 乳幼児, 気管支肺胞洗浄液, 炎症細胞

## 要 旨

Wheezing を呈する乳幼児の選択的手術時などの機会や、特に難治な患児に施行された BAL 液検査の報告 4 編を俯瞰的に検討した。難治例の報告 2 編で総細胞数の増加が認められた。全編に好中球%の増加が指摘された。好酸球%の増加は難治例の報告には認められなかった。1 編で「アトピー喘息」の群での好酸球%の増加が指摘されたが、3%以上は1/3と一部であった。難治例での気管支生検でも好酸球の増加はないとの報告があるが、剖検例では好酸球性炎症の指摘がある。乳幼患児の気道の病態は未だ明らかでない。長期の経過や後の肺機能と関連付けた研究が望まれる。

## はじめに

小児気管支喘息は乳幼児期に発症することが多いが、特に重症児はその傾向が強い。年長児・成人の喘息患者には肺換気機能（以下、肺機能）の低下が認められ、これは普通、長期罹患による気道壁のリモデリングにより説明される。しかし、最近、低肺機能の骨格とも言える状態は学齢前に既に形成されていることがわかってきており<sup>1)</sup>、学齢前の wheezing を呈する児への対応やその発症予防<sup>2)</sup>の重要性が一層高まった。

そのためには、気道内の病態をよく知る必要が

ある。しかし、乳幼児期には~50%もの児が、多くは気道感染に伴って症状を経験し、その過半数は就学期には軽快し、臨床上的表現型は一様ではない<sup>3)</sup>。しかも、乳幼児の気管支肺胞洗浄 (BAL) 液や生検検査は人道的、手技的に制約があり、その報告は限られている。

反復性 wheezing の乳幼児にも吸入ステロイド剤は効果を示すことから気道炎症の存在が考えられ、発症前の新生児に気道炎症の指標の一つの呼気中 NO の上昇を認めた報告さえある<sup>4)</sup>。1~3歳の喘息の剖検でも気道粘膜への好酸球の浸潤が認められている<sup>5)</sup>。

他方、可逆性の気道閉塞を確認した2歳未満の重症児の気管支生検で、好酸球性炎症と上皮下網様基底膜の肥厚の両者とも認めなかったとの報告